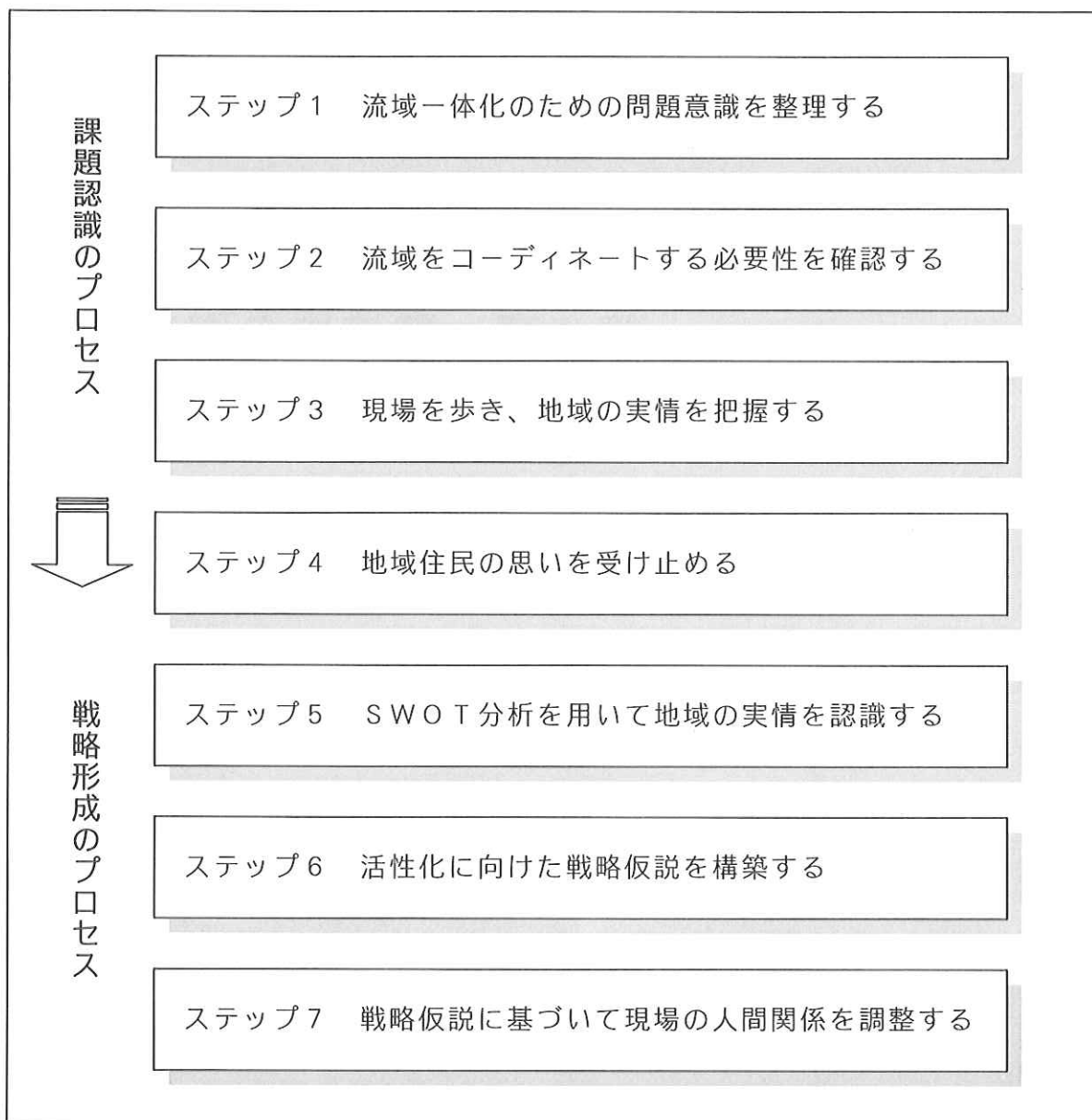


## 第 2 章 各流域の取り組み

## 第2章 各流域の取り組み

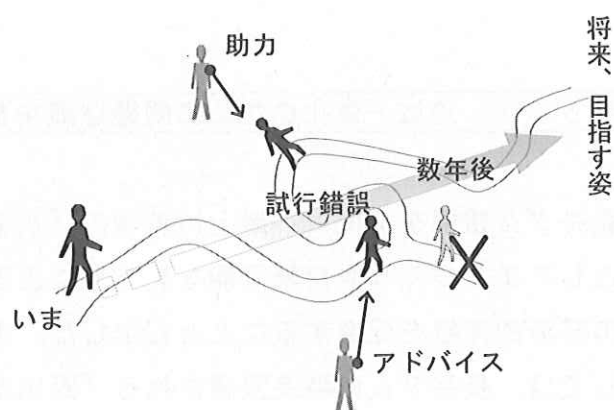
### 1. 流域一体化のプロジェクトマネジメントのステップ

この章では、各流域の取り組みについて整理します。整理にあたっては、以下のステップを追いながら紹介します。



本報告書は、「流域を一体化させながら水源地域を活性化させること」を目的とする「地域コーディネーター」の立場から、3つの流域での展開を、ステップを追いながら整理したものです。

このような形式の報告書とした理由は、本報告書を読んで頂ける方は、そもそも、ご自身が地域の活性化のために何らかの“きっかけ”を形成しなければならない立場にいる方々だろうと予想されるからです。このような方々にとって関心があることは、紹介される事例の内容はもとより、「流域一体化による水源地域活性化」という目的達成のために、どのような過程（プロセス）や試行錯誤を経たかということです。



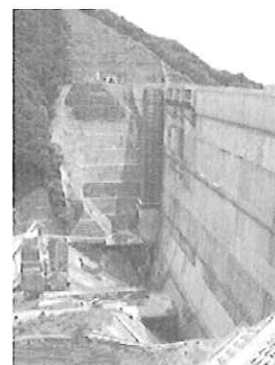
このことから、本報告書では、調査の過程で得られた知見を、「地域コーディネーター」の目から組み立てることにより、同じ立場に立った読者が追体験できるように構成しています。本報告書の読者は、自らが「地域コーディネーター」になったつもりで読み進めてください。

## 2. 最上川流域における一体化の取り組み

最上川を擁する山形県長井市の流域一体化による水源地域活性化の取り組みについて整理します。

### ステップ1 流域一体化のための問題意識を整理する

長井ダム整備を契機に、最上川流域の「水循環」をテーマとしたまちづくりや持続可能な観光等による活性化と流域の経済的連携を促進することとしました。また、長井市としては、長井ダムに隣接整備される「野川まなび館」のソフト的展開方策の検討を行っていきます。



長井ダム整備中



### ステップ2 流域をコーディネートする必要性を確認する

長井市では、すでに最上川流域観光交流推進協議会によって「リバーツーリズム」をテーマに「水循環」「観光」「環境」といった視点でソフト事業を展開してきていますが、やや行政主導が強く民間の主体育成・主体的展開が必ずしも進んでいません。上記協議会などでは、行政側担当者の異動のたびに同じ議論を繰り返しがちでした。

このため、課題解決の継続性や新たな戦略形成が進まない状況にあります。また、自分たちができることを観光商品化しようとしているため、来訪者や都市側マーケットから見て、必ずしも魅力



的な観光商品になりません。例えば、「まなび館」の利用を促進したいと考えた場合、まなび館だけでイベントを開催しても、遠方の人が来訪する動機にはなりません。長井・置賜・最上川の連続性の中で位置づける戦略づくりが必要となっています。

これまで行政が先行して展開してきた流域の様々な活動の中から、地域活性化の取り組みにつながる部分は民間の人たちに継承し、運営体制の構築やソフト開発能力の向上が必要となっています。

### ステップ3 現場を歩き、地域の実情を把握する

#### 1. 長井市の概要

長井市は、山形県置賜地域にある人口3万人の都市です。歴史的には、日本海に面した酒田から、最上川を經由して米沢に至る最上川舟運ルート of 終着港として栄えました。現在でも、長井紬が有名です。そして、中心市街地では、いまでも以下のような歴史的建造物が見られます。

- 300年続いた呉服商「丸大扇屋」の建物を中心とした資料館、長沼孝三彫塑館
- 小桜館（旧西置賜郡役所・明治11年築・公開・長井市指定文化財）
- 桑島記念館（旧桑島眼科・昭和5年築・公開・長井市指定文化財）
- 旧小池医院（昭和6年築・個人宅・非公開）
- 山形鉄道長井駅（旧国鉄長井駅・大正3年築・公開）



その他、市街地には珍しく茅葺屋根の民家および商家、蔵などが複数残されています。



長井市の中心市街地には、地域づくりの拠点が2カ所あります。まず、「ぬくもりの壁あやか」は、空き店舗活用の一つとして、山形工科短期大学の学生により土壁のある和風の交流空間として改築されました。現在は、「長井まちづくりNPOセンター」の活動拠点として、また、ギャラリーや観光案内所として活用されています。もう一つ、長井駅前には、長井産のレインボー野菜などを販売し、情報発信の拠点となっている「長井村塾」もあります。レインボー野菜とは、市内で排出されたごみを堆肥化し、その有機肥料で栽培した有機野菜です。この取り組みは、長井市が循環型社会を目指して策定した「レインボープラン」に基づいた取り組みです。これに関連して、食品消費者と農業者の距離を縮める「食の安全安心=レインボープラン特区（構造改革特区）」が認定されています。



長井市は、「水と緑と花の長井」というキャッチコピーを掲げています。市内には、「久保の桜」「松ヶ池公園（白つつじ公園）」「あやめ公園（あやめまつり）」など季節を彩る花が咲き誇ります。また、歴史的な文化として5月下旬の「黒獅子祭り」があります。これは各地区の黒獅子が、町を練り歩く神事です。



長井市は山形鉄道（第三セクター）の本社所在地で、市内に山形鉄道フラワー長井線の駅が多数あります。中心となる長井駅までは、山形新幹線赤湯駅から約30分です。上野樹里や竹中直人らの出演による映画「スウィングガールズ」（監



教室を開催しています。



長井ダムの見学



まなび館の見学



下流域 (酒田)



小鶺飼船



最上川流域図  
(国土交通省  
ホームページより)



中流域



上流域 (長井市)



上流域 (長井市)





### 3. 最上川フットパス

「フットパス」とは、イギリスが有名で、「ハイキングなどで歩くことを楽しむための小道」のことをいいます。長井周辺の最上川では、美しい自然や沿川の観光資源などの魅力的な場所を「フットパス」でつないでいます。木道や飛び石、丸太橋などを設置し、川沿いを歩く楽しさを引き出しています。ルート沿いには、案内標識も整備されています。



フットパス

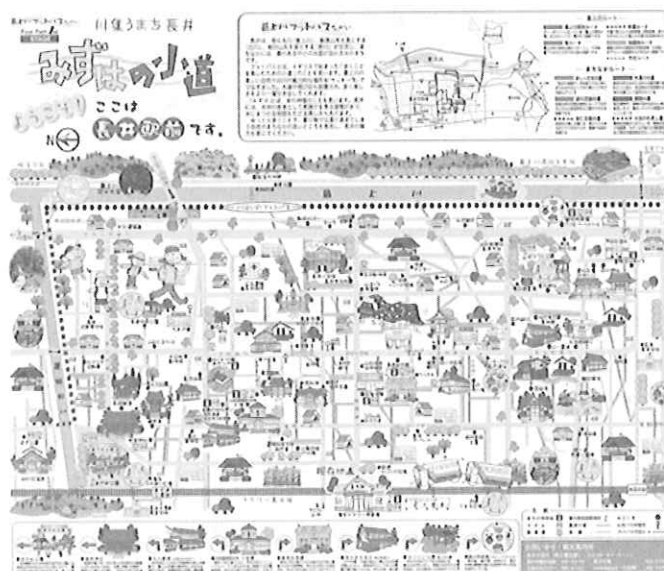


図 歩くためのマップ

### 4. 「不伐の森」と「不伐の森に親しむ会」

長井市は、「長井市不伐の森条例」を制定し、長井市東部にある一定の範囲の森（市有地）を「不伐の森」と指定することで森林の保存を目指しています。また、平成 12 年には「不伐の森の理念をもう一度考え、私たちがやれることを進めていきませんか。森に遊び、汗をかき、語り合いませんか。そこから、私たちのこれからのあり方、ふるさとの姿がみえてくるような気がします」の趣旨に賛同したボランティアの方々により、「不伐の森に親しむ会」が発足しました。



## ステップ4 地域住民の思いを受け止める

長井市住民の地域づくりの取り組みについて聞き取りを行いました。

### ■ 不伐の森に親しむ会

- 不伐の森に親しむ会は、平成元年に長井市が全国に先がけて制定した「不伐の森条例」によって指定されている「不伐の森」をフィールドに、植樹や下刈りなど様々な活動をしています。
- 全国初の不伐条例を制定した。土地は、町有地を中心としている。
- 代表は、江口さん（塗師）。事務局長は、隣接地区出身であることから布施さん（長井市役所職員）
- 年に数回の森林整備作業 ボランティアで。経費もあまりない中での手弁当作業。
- 地域の子どもたちに環境学習の場を提供。インタープリターは、布施さんたちご自身。
- 活動は、布施さんの実家（今は空屋）を拠点とし、春夏秋冬の活動プログラムを行っている。例えば、冬は凍み豆腐づくり
- 不伐条例を制定した途端に、隣接する民地の森が伐採され、人工林に置き換えられてしまった。
- 長井市には、黒獅子の祭が伝統として残っている。最上川流域の酒田の方にも、獅子の祭が残っている。かつての流域の交易の証しではないだろうか。この黒獅子をテーマに流域での交流を取り組んでみたい。

### ■ 山形工科短期大学教員（建築士）

- この学校は、大工さんの養成学校
- 山のてっぺんに校舎（寄宿舍）
- 自分たちの工芸作品を街中の空き地や街角などに展示している。
- 長井ダム整備に伴う活性化の検討委員会の際に、「水循環」のまちづくりを提唱した。

### ■ 長井市教育委員会の方（立ち寄り先の文教の杜で）

- 明治の頃、生糸産業で長井は活況。
- 名残で商家にはお宝が眠っている。
- これらの宝物は、当時、都市の画商が訪れては、地元の豪商に売り歩いたもの。

### ■ 長井まちづくりNPOセンター

- 名古屋・海外でまちづくりのNPO活動
- 家業の酒屋を継ぐため帰郷
- 長井の中心市街地の商店街では、シャッターアート等に取り組む

- 長井ダムの整備を契機とした「水循環」のまちづくりに関わることをきっかけに、平成 14 年 水を活かしたまちづくりシンポジウムに参加
- 長井市内で進めている「フットパス」の推進会議などに関与
- 2003 年に「ふるさと山形塾」に参加
- 当時の長井市建設課長・浅野さんや国交省河川国道事務所の所長さんなどの後押しを受けて、2004.11 から、長井まちづくり NPO センターを発足
- 最上川の流域ネットワークの実質的な事務レベルの世話役 本人としては、長井だけでも多忙な状態で、流域までは手が出せないとの思い。(拠点を作れないから)
- 最上川流域では、例えば、千曲川（長野）の「川の駅」や北上川の「1 ポート」のような拠点を作る必要があると考えている。
- 長井ダム整備に伴い、長井ダム資料館である「野川まなび館」を平成 23 年に国から長井市に管理移管されるので、それを活かせないか。
- カヌーの艇庫や活動拠点となると良い。
- 9 月からは、インタープリターの養成事業を始める。利用者に地域にお金を落としてもらい雇用できるようにしていきたい。
- (長井市農林課と共に) グリーンツーリズムの冊子をつくったりして、365 日楽しめるメニューづくりを図っていく。
- 最上川フォーラムは、600 人の会員がいる。県の職員の専従が 3 人で、6 つの部会で構成されている。旅行代理店の JTB が、関与している。
- 最上川には、「ビューポイント」が 11カ所認定されている。しかし、そこに行くための案内情報がない。そこに行っても、残る 10カ所についての案内がない。
- 2～3 年後に、水の拠点づくりを図りたい。
- 「フットパス」の整備も第 2 段階に入っていく。
- 今春から、長井市が「まちづくり基金 (9000 万円)」をはじめた。
- 活性化のターゲットは、ナイスミドルだと思う。エリア的には、仙台と・首都圏になる。
- これらの活動を行っていくパートナーとしては、例えば JR 東日本がある。仙台でデスティネーションキャンペーンを展開してくれている。ほかに、「せんだい宮城 NPO センター」や「水環境ネット東北」などの団体がいる。
- いま、東北の中の「最上川の位置づけ」が必要だと思う。
- 各地区の課題を解決するには、各地区だけでは無理で、地域全体で解決することが必要。例えばグリーンツーリズムで民泊の展開をしたい。ここで 2 泊してもらうには、山の文化と川の文化を楽しんでもらいたい。そのためのインタープリターの養成をはじめた。しかし、全体を面倒見られるコーディネーターがいらない。

■ 県民ネット最上川 (佐藤先生)

- 学術的な組織

代表者の職氏名	会長 佐藤 五郎
設立年月	平成 10 年 7 月 24 日 会員数 12 人

活動の目的	美しく快適な“最上川”づくりの推進 豊かな風土を形成し、産業を起し、文化を育て、郷土愛を育ててきた山形県の母なる川である最上川を本県のシンボルとして、県民と最上川との多様なかわりあいの展開を図ります。
活動に取り組んだ契機	山形県の母なる川・最上川と県民とのかわりあいを深めようと、同じ志の人々が集まりました。
これまでの活動内容	川はゴミであふれています。ボートに乗り、川を回り、人々にこの実態を見てもらうことにより「最上川」を守ろうという意識を醸成しようと、河川観察会を長年継続しています。河川観察会のほか、最上川・県民活動交流会などを行い、県民の最上川に対する関心を高めています。
活動の独自性・特色	活動範囲を一市町村だけにとどめず、広く県民を対象に活動していること。
地域住民との協働・交流	県内各地を回ってイベントを行っています。河川観察会もこれまでに12回を数え、大江町や長井市、寒河江市、天童市、河北町、酒田市、新庄市、米沢市、中山町、大石田町、朝日町、白鷹町と回り、各地の人々と一緒に実施しています。
他団体、行政、企業等との協働・交流	各市町村の環境保全団体のほか、国土交通省や山形県などとも連携して事業を実施しています。

- 「最上川博物館」「水の駅」の構想を最上川源流の地にでも具体化したい
- 長井ダムに隣接して整備した「野川まなび館」の名称は、考え直すべきではないか。もっと、最上川にちなんだ名前にした方がよい。そうすれば、下流域の人も来てもらえる。最上川の広報活動をしっかりして、あそこに行けば何が学べるかを明確にした方がよい。
- (長井市) 長井ダムの竣工がよいチャンス。その時にアピールしていくことを検討。
- 河川環境管理財団からの助成を受けて、舟運・水路の測量を行っている。長井には 300 年前の水路が残っている。これをリーフレットにしていこうと考えている。
- 今の観光客の中でも団塊の世代は、学びの意欲が高いと思う。大石田には船大工が居た。左沢の大井町には舟が残っている。最上川は、酒田から左沢までは大舟、左沢から長井までは小舟、そこから上流は川に水があるときでなければ舟運で運べなかった。
- 「世界遺産」の登録への動きがある。最上川と出羽三山。
- 水の郷をキャッチフレーズにして人が来るのではないか。長井の水質は、花崗岩からの湧水で最上川の中でも随一のものがある。
- 市内の水路は、例えば、ぼんぼりのようなもので水路を引き立てることを考えるべきではないか。光によって、水が引き立つ。
- 人を引きつける魅力は、きれい、おいしい、知らないことがわかった、といったことだと思う。
- 関連する団体としては、新庄のもとあい会、美しい山形最上川フォーラムなど。

■ 長井市

- 「あやめ（菖蒲）」の古種が多く残された町である。菖蒲公園には、100万本500種類が植えられている。
- ISO14001ではなく、独自の環境マネジメントシステムの構築を目指している。
- ダム周辺整備計画も今年が見直しの時期である。気になっていたのはソフト的な展開。流域で一体となって行くにはどうすべきかを考えていきたい。このためには、地域でどのようなパフォーマンスが必要か。市民が活動する動機は、達成感と経済的な意味、社会的貢献などではないか。NPOにも期待している。
- これらのためには、自分たち自身も行動しなければならない。
- 長井市の森はほとんどが国有林である。
- 環境・食材生産に努力してきた。最上川のイメージを全国に広げていきたい。
- 主要な地域産業は、コンデンサーなどの電子部品、いわゆる弱電産業である。アッセンブリーなどの組み付け部品を作る企業が150社ほどとなっている。地域では、自分たちでロボットを作りコンテストを行ったりしている。地元の高校生の就職状況も良い。
- 繊維では、グンゼ産業がある。YGというブランドのシャツを生産している。

ステップ5 SWOT分析を用いて地域の実情を認識する

最上川流域の一体化による水源地域の活性化を考えるために、関係者による地域分析を行いました。

交流人口の拡大に向けて

外部環境の変化（マクロ要因）

項目	内容	最上川流域活性化にプラスと思われる変化（上段） 長井市活性化にプラスと思われる変化（下段）	最上川流域活性化にマイナスと思われる変化（上段） 長井市活性化にマイナスと思われる変化（下段）
社会	価値観 ライフスタイル	<p>白鷹町の世帯数が増えている。 大江町に水の駅がある。 置賜さくら回廊が集客力あり フットパスの知名度が上がっている</p> <p>①健康と環境を志向するライフスタイル（LOHAS = Lifestyle of Health and Sustainability）への意識変化 ②自然・田舎・農への回帰志向 ③退職後に生活を楽しみながらボランティアを行う人が増えている</p>	<p>白鷹町は山形市を経済圏と考えている。</p> <p>①経済的合理性の追求（子育てに対する社会負担、企業負担、個人負担の回避）の結果による少子化⇒人口減少 ②世代間、地域間による価値観の乖離が埋まらない。 経済合理性・開発重視志向 ⇔ 持続可能な経済活動 ③目の前に見える自然環境破壊には敏感だが、見えない変化への想像力の欠落している。</p>
	人口動向 自然環境	<p>朝日新聞で紹介された2015年魅力的な都市ランキング東北1位。高齢化が進みにくく地域の働き手の比率が高く生活水準が上がるだろうという予想。 環境に取り組む団体が増えてきている。 環境に関するボランティアが増えてきている。</p> <p>①レインボープランの理念に関心を持ち、長井市へ住んでみようという人が現れている。 ②退職後に楽しみながら農業をしようとする人が現れている。</p>	<p>企業局の発電管理事務所が寒河江に移転。</p> <p>①流域全体で高齢化が進展している ②高齢者のみの世帯、高齢者単身世帯が増加している</p>

経済	景気	<p>寒河江は高速道路のインターもあり、発展してきた。</p> <p>①環日本海物流拠点またリサイクルポート（総合静脈物流拠点）として酒田港の21世紀北前船構想の推進が進められている。</p> <p>②やまがた花回廊キャンペーン「花」、「歴史文化」、「食」、「街中歩き観光」の広域観光の推進がなされている。</p>	<p>最近は、新たな誘致企業がほとんどない。</p> <p>①国の構造改革による地域経済の衰退（農業、建設業）</p> <p>②商圈の吸引力の低下、広域化（食料品以外の市外店舗、ネット販売での購入増加）している。</p>
		<p>高校生（特に工業高校）の地元就職率が高い。 地元への就業人口は製造業を中心に多い</p> <p>①長井ダム建設工事の経済波及効果 24 億円</p> <p>②地元長井工業高校生の地元就職率が 9 割に達する</p> <p>③「置賜桜回廊」、「街中歩き観光」の推進に向けての観光ボランティアガイドの養成、特産品開発（桜肉フランクフルト、レインボー酒米による特別純米酒「甞る久保ノ桜」）、街中を花で飾ろうというボランティア活動が行われている</p>	<p>ダム建設が終わりを迎える。 中心市街地商店街がシャッター通りに。</p> <p>①過去の公共事業投資による市の財政悪化が続いている。 長井市実質公債比率 26.7%（04～06年の平均） で県内市町村 35 市町村の下から 2 位。</p> <p>②国の構造改革による地方交付税減少による財源不足によって事業が抑制されている。</p> <p>③平成 22 年でダム建設工事が終了予定で建設業の先行きが不透明となっている。</p> <p>④長井職安管内新規高卒者離職率 55.5%（全国、県 50%弱）</p> <p>⑤第 3 セクター事業の経営不安（日本アルカディアネットワーク（通信）、山形鉄道（交通）、置賜地場産業振興センター（産業活性化））が顕在化している。</p>
産業	産業構造 好不況	<p>電解コンデンサーやアルミの冷間溶接技術は全国トップクラス。</p> <p>①電子部品製造などの製造業の技術力が全国的に評価高い。受注増加傾向にある。</p> <p>②長井市の製造品出荷額は 585 億円で製造品出荷額に対する付加価値割合 50%を超え県内 13 市中最も高い。</p> <p>③秋田、岩手、山形県で国内産ホップの生産量 90%を占めている</p>	<p>①県内、市内における非正社員の割合が 30%程度占めている。</p>

		<p>弱電産業が地域の主力産業となっている。</p> <p>長井、白鷹、飯豊で中小企業が約300社ある。</p> <p>毎年、ロボワン、マイクロマウス大会を開催している。</p> <p>①レインボープラン特区＝農業特区として農業へNPO、株式会社法人の企業参入を2004年より実施している。</p> <p>②製造業は、製造品出荷額等(58,572百万円＝H17)の80.7%を金属・電気・機械分野が占め、電気機械・精密機械は出荷額等全体の37.5%と突出している。</p>	<p>観光業がかなり少ない。</p> <p>これが長井の土産というものが無い。</p> <p>①全国自治体平均所得長井市1667位274万円(1位東京都港区947万円山形市548位323万円)</p> <p>②長井市の農家率1,629/9,735世帯＝16.7%。農家離れが進んでいる。農業専従者生産所得1,315千円。</p> <p>③農業は、販売農家の経営耕地面(2,733ha)の約93%が水田で、農業産出額(5,050百万円＝H16)も約56%が米で占められており、米単作地帯といえる特徴を示している。</p> <p>④商業は、西置賜の中核都市として、周辺からの集客力をもった商圈を有しているが、郊外型店舗の出現、商圈の広域化で集客力は弱まっている。</p> <p>第一次産業就業人数約1,451人(9.2%)</p> <p>第二次産業就業人数約6,425人(40.5%)</p> <p>第三次産業就業人数約7,983人(50.3%)</p> <p>[H17.10.1現在]</p>
イノベーション	技術革新	<p>①次世代電池用コンデンサーの市場拡大に対する生産設備投資が見込まれる。(ハイブリット車、大型建設機械用)</p> <p>②山形の新銘柄米「山形97号」が平成22年10月にデビューが予定されている。</p> <p>③最上川に放流される鮎稚魚の県内養殖体制が確立している。</p> <p>④バイオ燃料の生産加速化によって、おいしい米づくりから多収穫米、多収穫飼料作物への転換が指摘されている。</p>	



		<p>新たにCPU回路周りのコンデンサ部門で従来より、かなりコンパクトにできる製品を開発している。</p> <p>①ロボット開発や現場改善、受注拡大、他地域との交流を目指して「ものづくり若手塾」が開催されている。</p>	
社会 基盤 など	道路整備 公共交通 その他	<p>山形中央高速道の建設が米沢で始まった。 フラワー長井線は映画やドラマの舞台になった。</p> <p>①東北中央自動車道（福島～米沢工事中、米沢～赤湯間開通）が整備中である。（福島～米沢 58分⇒38分に短縮） ②地域高規格道路新潟山形南部連絡道路の整備が進められている。 ③日常生活の公共交通手段がないため、山形県内の自動車普及台数は1世帯2.35台。隣町の飯豊町2.99台で全国2位。長井市の場合は2.55台となっている。</p>	<p>フラワー長井線は赤字。 最上川沿いの道路は明らかによくない。</p> <p>①第3セクター山形鉄道の赤字（少子化の影響による沿線高校生の減少が大きく響いている） ②携帯電話などの通信費、自家用車にかかる維持経費で他の消費に支出が回る金額が少ない。</p>
		<p>これから国道287号、113号の整備が市内に入ってくる。 さくら大橋が今年完成した。</p> <p>①光ファイバー網敷設が長井市内ほぼ100%となっている。 ②市内路線バスの民間撤退によって市営バスの運行を行っている。</p>	<p>公立置賜総合病院が市の郊外に建ち、旧市立病院は、規模が縮小しサテライト病院となり不便になった。</p> <p>①日常生活において高齢者の外出が制限される状況が見られる。</p>

交流人口の拡大に向けて

外部環境の変化（ミクロ要因）

項目	内容	最上川流域活性化にプラスと思われる変化（上段） 長井市活性化にプラスと思われる変化（下段）	最上川流域活性化にマイナスと思われる変化（上段） 長井市活性化にマイナスと思われる変化（下段）
市場	市場規模 規制緩和 商品価格	飯豊町はどぶろくの特区を取得 ①農業特区が全国展開されて 2008 年企業の農業参入促進、一般農地借り入れ解禁が検討されている。	①米の自由化（生産・販売の自由化）によって、農業所得が減少している。
		有機野菜をネット販売するようになった ①農産物直売所の開設の広がりによって、市場ルートにのらなかった少量ロットの生産物の販売が可能となった。 ②少量ロットの販売が可能なおから楽しみながらの農業スタイルが生まれている。	隣町でも似たような動きがある ①個人経営の農業後継者が減少している。
顧客	ニーズと 変化	①観光立国ビジットジャパンキャンペーンの中での最上川流域観光交流づくりモデルが展開されている。 ②食の安全が求められている。	①今後の教育改革で総合学習の時間数の減少によって、体験学習時間数の減少が予想される。
		平野地区で交流している川崎市多摩区中野島の住民とは小規模ながら交流が続いている 長井の地域情報発信として ①ポータルサイト「タウンナビ」 ②ながい TOWN ガイドマップ ③長井ナイトガイド（クーポン付） ④そば・らーめん街道食べ歩き観光マップなどの取り組みがされている。	あやめ公園の観光だけでは、お客様が満足しない ①情報の発信が必要との認識はあるがターゲットの絞込みがなされていない。 ②供給者サイドの意識先行であるものを載せているだけで情報が精選されていない。
競争 相手	相手の戦 略 行動 新規参入	①単一の自治体単独での戦略展開は困難で広域対応が必要と認識し、動きは始めている。	
		あやめ公園と飯豊町ゆり園の開花時期が合うことで、観光客の流れができつつある	①滞在型観光客を増やすという場合でもターゲットが絞られていない。 （どの季節に？どのひと（年代、性別、職業）？ どこで？ なにする？）

交流人口の拡大に向けて

内部環境の変化

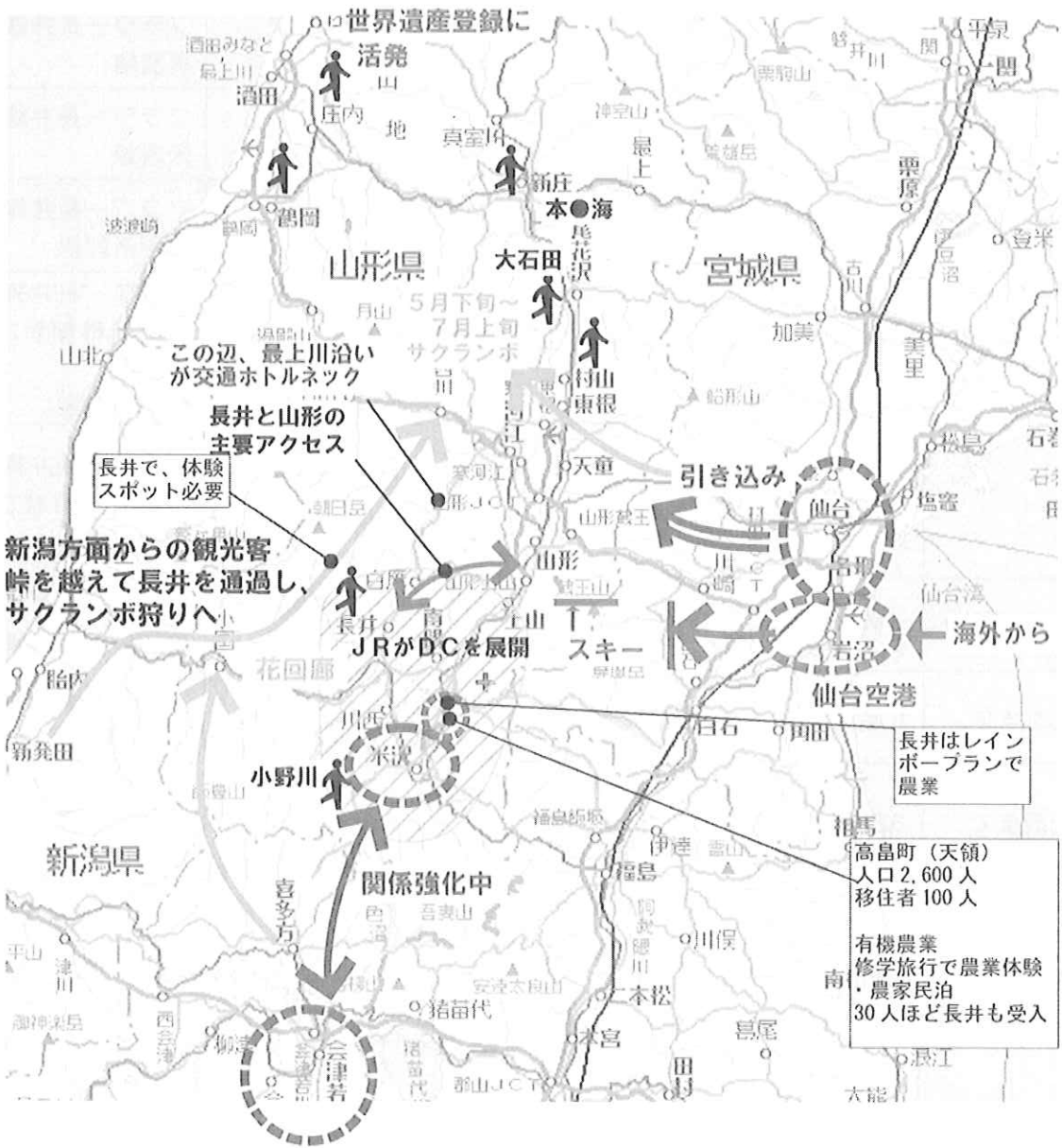
項目	最上川流域（上段） 長井市（下段）	
	強み	弱み
サービス 資源	安定した水量が流れている	最上川沿いの道路が充実していない
	水量が豊富で水不足にはなったことがない	山形市及び村山周辺へのアクセスが不便 降雪量が多い
PR マーケ ティング	上流の一部だけだが、桜回廊のPRをしている 桜は春の観光コースとして定着しつつある 朝日町、長井市の花火大会や寒河江の花咲フェアなど川沿いのイベントがある 各エリアでフットパスが整備されてきた	部分的な売り込みはあるが上下流をとおしてのものがない
	桜、白つつじ、あやめ、飯豊町のゆりに観光客がきている フットパスが整備され、街中にも散策コースが設定された 街中を案内するボランティアガイドが発足した	交通の便がよくなり、花以外の観光資源に乏しいため通過型のお客様がほとんど 水路や水辺のスポットを整備することは財政的に無理
人材 組織	最上川観光交流推進協議会が組織された	流域市町村の交流があまりない
	NPO法人やボランティア団体は福祉が主流だったが環境に関する団体が増えてきている	それぞれの組織がそれぞれの活動をし、無駄が多い
技術 ノウハウ	米沢から寒河江、村山あたりまで最上川沿いには先端技術産業の製造工場が多い	
	長井は、コンデンサーを初めとした弱電部品の技術開発力が高い ゲンゼメリヤス工場が早くからあり、部分的な製造技術はシェアがかなり高い	

生産	<p>置賜の米は、「はえぬぎ」が主流で約50万俵はセブンイレブンの「おにぎり」になっている 米沢牛はブランドとして確立している</p>	<p>特産物で有名な物はあまりない</p>
	<p>レインボープランを中心とした有機農業が少しずつ増えてきている 競技用剣玉の約8割は、長井から生産されている 米沢牛となる牛肉は、長井からの生産量も多い</p>	<p>長井は、主産物が米でそれ以外の農作物は一部のスイカを除いては知名度がなく、流通にも乗らない</p>
文化 風土	<p>流域で共通していることは、「そば屋」が結構多いこと</p>	
	<p>特に街中には、川を生活の一部としていた文化があった 黒獅子は、この地域にしかなく黒獅子まつりには多くの人が集まる</p>	
景観	<p>置賜は、イザベラ・バード氏に東洋のアルカディアと絶賛された 最上川沿いは風光明媚な風光明媚な場所がいくつかある</p>	
	<p>山、川、田園、街とバランスがよい 西部の田園地帯には、散居の集落が形成されている</p>	
観光客	<p>舟下りの観光は有名である</p>	<p>川の観光は、県内でも2箇所しかない 長距離の下りはやってない</p>
	<p>年間約55万人が桜、白つつじ、あやめを中心に訪れる</p>	<p>通過型の観光しかなくせいぜい2時間程度しか滞在しない</p>
食材	<p>共通した食材はいも煮会の“芋” 米沢牛、山形牛 サクランボ、ぶどう、ワイン、洋ナシ（ラフランス）</p>	
	<p>長井は、米沢牛</p>	<p>流域の食材はほとんどあるが、長井でしか求められない物はない</p>

長井市と最上川流域の地理的關係性

長井市から	自動車		電車		その他の方法
	車で、 何時間	利用条件のメモ ・一般道のみ ・高速道路併用の場合 (通常、使用する インターチェンジ)	電車で、 何時間	最寄り駅 は？	
山形市まで	50分	一般道	1時間	長井駅	フラワー長井線 奥羽線
米沢市まで	35分	一般道	44分	長井駅	フラワー長井線 米坂線
新庄市まで	2時間 30分	一般道	1時間 40分	長井駅 赤湯駅	フラワー長井線 山形新幹線
酒田市まで	2時間 30分	一部高速 (庄内あさ ひICまたは西川IC)	2時間 41分	(山形まわ り) 長井駅 赤湯駅	フラワー長井線 山形新幹線新庄 経 由陸羽西線
			3時間 17分	(新潟まわ り) 長井駅 今泉駅	フラワー長井線 米坂線坂町經由 羽越本線
仙台市まで	2時間	高速 (山形蔵王IC)	2時間 30分	長井駅 山形駅	フラワー長井線 奥羽線、仙山線
東京まで	5時間	高速 (福島飯坂IC)	3時間 30分	長井駅 赤湯駅	フラワー長井線 山形新幹線
大阪まで	8時間	高速 (中条IC) 新 潟まわり北陸自動車 道	5時間 45分	長井駅 赤湯駅 東京駅	フラワー長井線 山形新幹線 東海道新幹線

# 流域相関図（最上川）



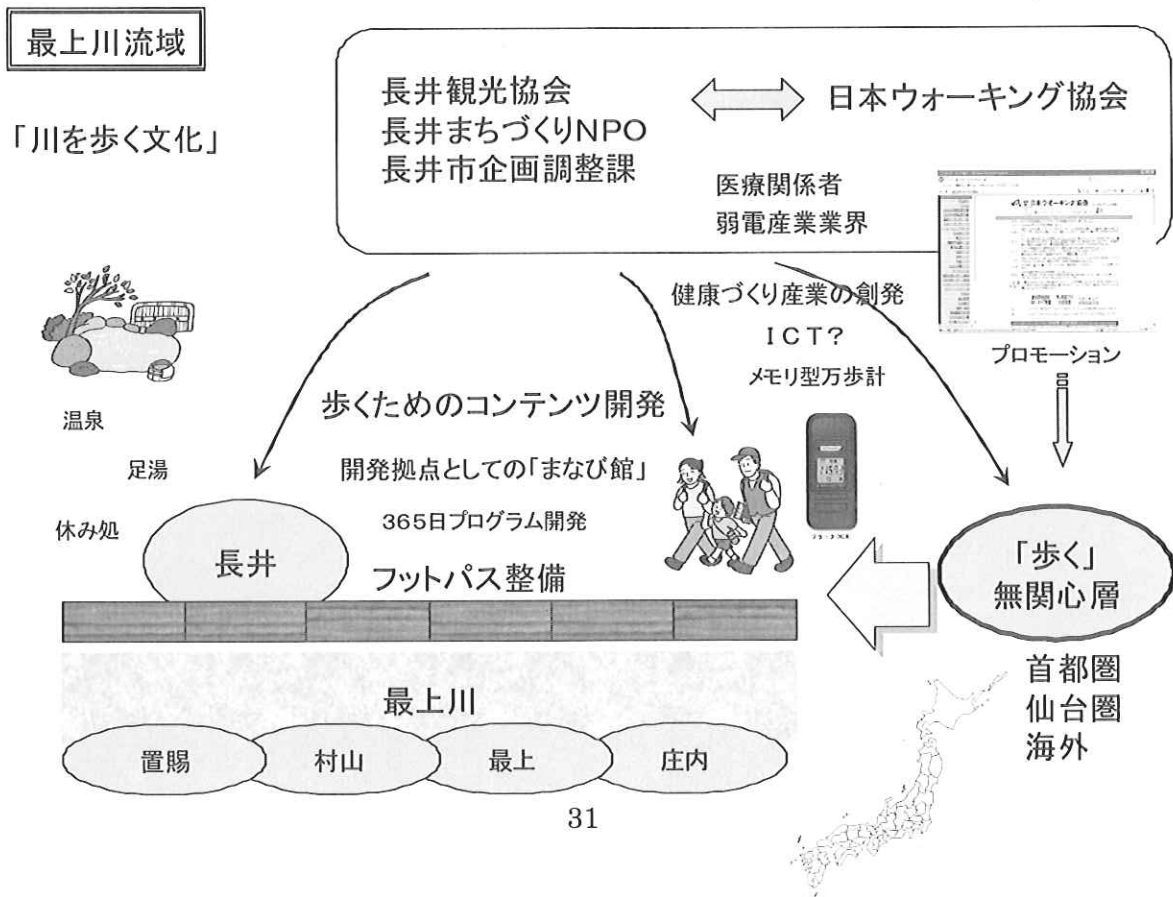
ステップ6 活性化に向けた戦略仮説を構築する

最上川流域の場合 ～「歩く」に焦点

マーケット側の非常に高いニーズとして「歩く」があります。気持ちよく楽しく歩けるといいう情報が、そこまで観光に出かける動機となります。この「歩く」の観点からあらためて最上川と長井市を見ると、最上川沿いにフットパスが整備されています。仮に歩くことに興味がある「無関心層」が最上川沿いを歩ければ、川に興味を持つ可能性があります。そこに川を発見するコンテンツを重ねれば、川そのものを楽しむことにも参加する可能性が生まれます。この結果として、「まなび館」も訪ねる動機が形成されます。将来的には、ロコミ（レピュテーション）で「川を歩くとしたら最上川」となる姿を描いていきます。

今後の実践

最上川流域では、マーケットのニーズに対して、「歩く」に関わるコンテンツを発掘していきます。同時に、コンテンツを繋ぐプログラムや「歩く」を観光に結びつける仕組みとしてICT化（※）などを検討します。また、「歩く」と欲しくなる休み処や足湯（赤湯温泉）など、楽しみを増大させる装置のあり方などを検討します。これらを踏まえ、2008年の秋に向けて、実際に仙台などをターゲットに最上川観光のモニターツアー実施を検討し、その成果から経済的に成立する「リバーツーリズム」の確立を目指します。（※ICTとは、Information and Communication Technologyの略で、情報通信技術を活用したコミュニケーションの意）



## ステップ7 戦略仮説に基づいて現場の人間関係を調整する

聞き取りを行った「長井市まちづくりNPOセンター」は、長井市で整備促進している「最上川フットパス（歩きを楽しむ道）」を新たな観光資源として、様々なプログラムづくりを行っています。同NPOのキーパーソンである青木氏は、長井市観光協会に勤務し、最上川流域の官民連携の様々な組織にも関わってきました。このため、長井市内に限らず、流域内の人材ネットワークを広く持っています。

地元行政の長井市の担当者たちの問題意識は、如何にして民間の人に活性化の動きをしてもらえるかという点でした。このため、「まなび館」も、最上川の観光促進の結果として活用してもらえることを望んでいます。

NPOや行政関係者による度重なる議論を通して、共通認識として若手を育てて観光促進を図ることが必要という方向性が導き出されました。そして、現在、この地域で観光等による地域活性化に取り組んでいる人材を巻き込んでいくこととなりました。



### 3. 吉野川流域における一体化の取り組み

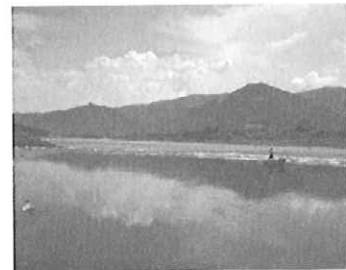
吉野川を擁する高知県嶺北地域の流域一体化による水源地域活性化の取り組みについて整理します。

#### ステップ1 流域一体化のための問題意識を整理する

水源地域である「嶺北地域」は、年を追って活力の源泉となる人材が減少・高齢化しつつあります。嶺北地域で取り組んできたこれまでの水源地域活性化の取り組みを、流域一体化の視点から深化・持続化させていくこととしました。

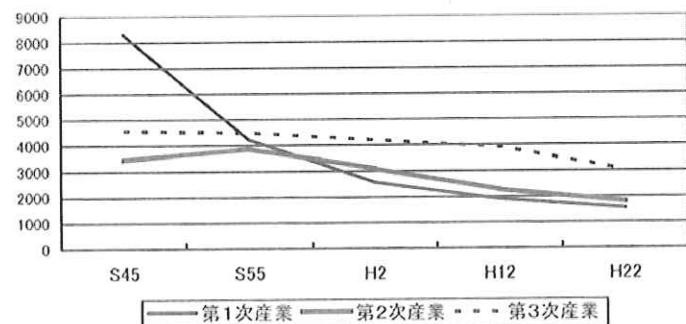
#### ステップ2 流域をコーディネートする必要性を整理する

嶺北地域では、木材関係者と下流地域の NPO により、水源地域木材で家を建てる動きは徐々に定着しつつあります。また農協を中心とした「れいほく八菜」も徐々に市場から評価されています。一方、これらを担う人々が高齢化する中で、次世代を育成する動きが不十分な状況です。例えば、大豊町の「碁石茶」は途絶えかけたものの、関係者の努力によって後継者が確保され、かろうじて技術が継承されています。一層厳しくなる過疎化・高齢化により、地域づくりを担うために発足した「れいほく NPO」も福祉や環境などの現状を下支えする業務で手一杯です。



吉野川では、他にも様々な団体が上下流交流を進めてきましたが、徳島市を中心に活動する「新町川を守る会」や香川県が深く関わっている「どんぐり銀行」以外は、民間を中心とした活動は衰退傾

嶺北地域の産業別就業者数推移



向にあります。嶺北地域では、素材提供は可能ですが、新たな商品開発から流通形成までの体力は、非常に弱い状況となっています。

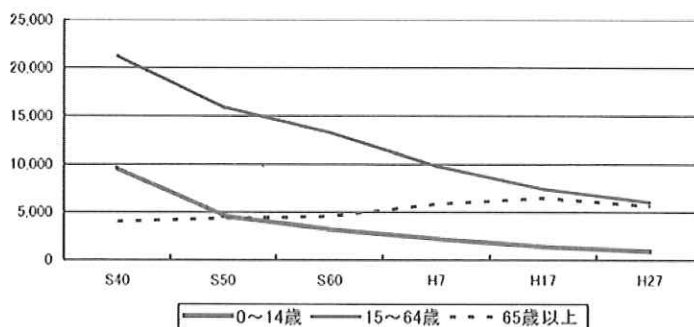
### ステップ3 現場を歩き、地域の実情を把握する

#### 1. 嶺北地域の概要

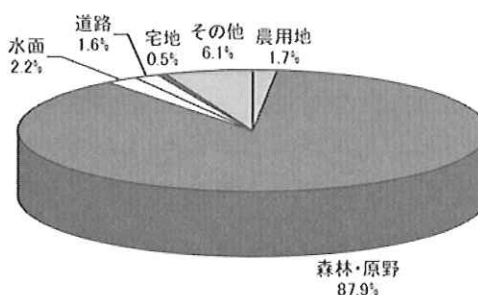
吉野川の源流に位置する高知県嶺北地域は、大豊町、本山町、土佐町、大川村から構成され、四国四県に水が供給されている早明浦ダムを擁しています。この水は、吉野川下流の徳島だけでなく、香川県や愛媛県、そして高知県内へと配水されています。このため、下流地域からは様々な上下流交流事業を通じて、嶺北地域と関わってきましたが、一方で、住民の主体性や交流をきっかけとした次の展開にはなかなか結びつきませんでした。そのような中で、平成11年に地元住民からの働きかけで、森林について考える全国規模の集いが開催されました。その後、嶺北の住民が主体的に地域づくりに取り組む流れをより強固なものとするために、嶺北広域行政事務組合や地域づくりや森づくりに関わる外部のNPOなどの協力支援を得て、徐々に嶺北住民の主体性を育みつつ、下流地域住民との新たな流域の関係づくりを目指して活動をはじめました。嶺北住民にとって、数年に亘る地域づくりの活動の経験は、やがて自ら地域づくりを行う「れいほくNPO」の組織化につながりました。

今、れいほくNPOでは、「れいほく環境わごん」の主催や吉野川流域のNPOとの連携などを通じて、嶺北の地域づくりに取り組んでいます。

嶺北地域の年齢階層別人口推移



嶺北地域の土地利用状況



## れいほく活性化機構（通称れいほくNPO）設立趣旨

嶺北地域は、吉野川の源に位置し、四国の水がめとしてあまたの命を支えています。そして、この地に生きてきた先人たちの営々とした暮らしの営みは、いま私たちの暮らしの礎となっています。嶺北地域に暮らす者として、これまで、森や水の恵み、自然と歴史に培われた嶺北の魅力を活かしながら生きてきました。

しかしながら、日本の高度経済成長の中で急激に社会状況は変化し、嶺北5町村が協力しながら地域活性化を図ってきましたが、広域的な取り組みや町村の懸命な努力にもかかわらず過疎化は進行し、今なお、嶺北地域で生きていく上で、暮らしも産業も環境も様々な課題を抱えています。

社会の成熟と共に、地域づくりは基盤整備だけでなく、子どもから高齢者まで心豊かに生きていくための仕組みづくりが求められています。このことは、日本において地球環境と高齢社会の時代の新しい生き方を見出す努力でもあります。

そのため、行政施策に加え、地域の住民も一体となった取り組みを行っていく必要があります。私たちは、かけがえのない嶺北地域の明日のため、地球環境と将来世代のためにも、互いの力を発揮しあいながら、都市や吉野川下流地域の人たちと共に手を携え、環境・産業・福祉・防災・情報化など幅広い活動を展開しながら、森と水の恵みを生かした新しい地域づくりを進めていきます。

平成17年10月

特定非営利活動法人れいほく活性化機構  
理事長 筒井啓一郎

### 平成17年

- NPO法人嶺北れいほく活性化機構設立総会 平成17年12月10日  
(平成17年10月26日 NPO法人認可)

### 平成18年

- NPO法人設立記念 れいほく活性化フォーラム「あなたは命を守れますか？」  
平成18年2月10日
- れいほく活性化まちづくり座談会（第2回） 平成18年12月3日
- 居住福祉人材養成講座（日本福祉大学主催） 平成18年3月4・5日
- 第5回吉野川流域水質調査 平成18年4月22日
- 第26回早明浦湖水祭シンポジウム（受託事業） 平成18年8月5日
- 第5回間伐材あめごレース 平成18年8月6日
- 第26回早明浦湖水祭「四国の子ども交歓会」（受託事業）平成18年8月24・25日
- 嶺北いなかインターンシップ 学生受け入れ 平成18年9月
- 第6回吉野川流域水質調査 平成18年9月30日
- れいほく活性化まちづくり座談会 平成18年11月14日
- 防災部会視察研修（れいほく人材養成自主企画研修支援助成）神戸・淡路島 平成18年11月18日
- 南海地震防災パネル展示・風船プレゼント 平成18年11月19日（本山町）

23日（土佐町）

平成19年

○～嶺北の未来を語る～れいほくで暮らそう・夢シンポジウム 平成19年3月4日  
（土佐町）

○NPO法人新町川を守る会 さめうら水源の森植樹 平成19年4月14～15日  
（大川村ほか）

○水の週間「子ども水の旅」（高知県からの受託事業） 平成19年8月5日

○第7回吉野川流域水質調査 平成19年7月22日

○第27回早明浦湖水祭「四国の子ども交歓会」（受託事業） 平成19年8月23・  
24日

○れいほく活性化まちづくり座談会（第3回） 平成19年9月21日

## 2. 吉野川と早明浦ダムの概要

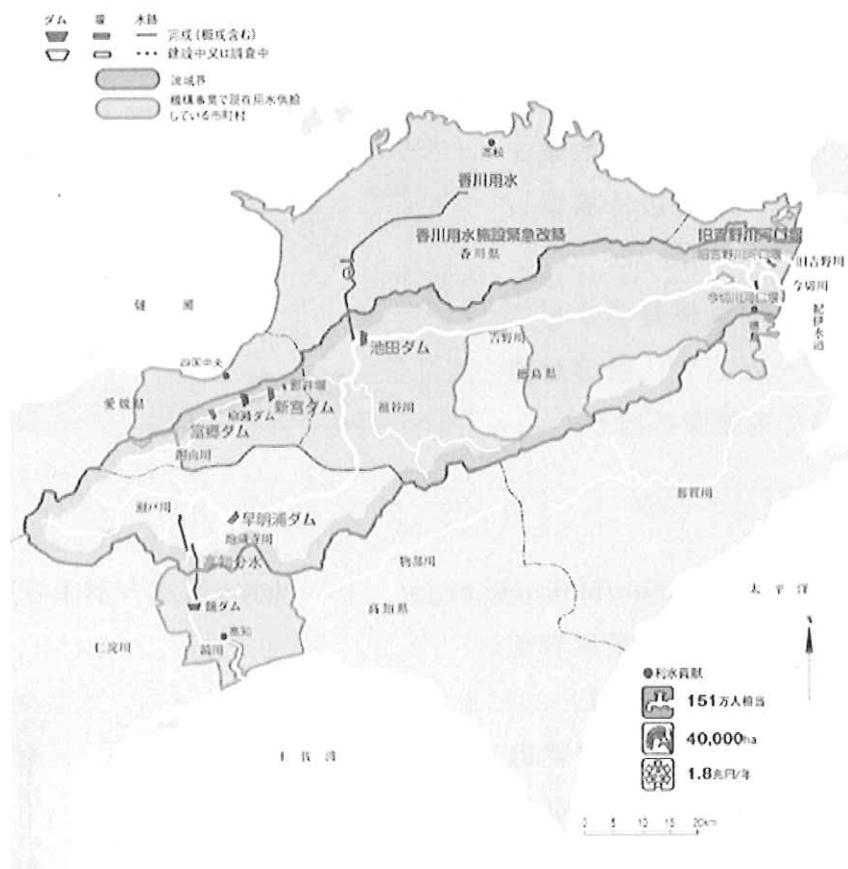
吉野川は、古くから利根川の坂東太郎、筑後川の筑紫次郎とならび四国三郎の異名を持つ大河川です。吉野川流域は、四国四県にまたがり、幹線淡路延長は194km、流域面積は3,750km<sup>2</sup>（徳島県63%、香川県1%、愛媛県8%、高知県28%）に及び、四国全域の約20%を占めています。その源は、高知県土佐郡瓶ヶ森（標高1,897m）に発し、四国山脈に沿って東に流れ、大歩危、小歩危の奇勝をつくり、銅山川、祖谷川などと合流して徳島県池田町に至ります。さらに、流れは岩津から徳島平野に入り、大小の支川を合せながら第十堰地点に達し、旧吉野川を分派して紀伊水道に注いでいます。豊富な水資源を持つ吉野川は、その豊れぶりをみせながらも、下流の徳島ばかりでなく分水によって、香川、愛媛、高知に対しても農業用水あるいは都市用水を供給し、これらの地区の人々の生活に大きな役割を果たしてきました。

しかし、それまでの吉野川の水利用は、局部的であってお互いの関連性も薄く、その水源開発にもおのずから限度があり、この豊富な水資源もほとんどが未開発の状態でした。昭和36年11月制定の水資源開発促進法及び水資源開発公団法を受けて昭和41年11月、吉野川が水資源開発水系に指定されました。さらに昭和42年3月に水資源開発基本計画が決定され、早明浦ダム建設事業が本格的に開始しました。

早明浦ダムは、吉野川水系における水資源開発の中核をなすもので、ダムに貯留した水を各種既得用水の安定取水に利用するほか、新たに年間8.63億m<sup>3</sup>の用水を開発して四国四県に供給すると共に、有効な落差を利用して電源開発を行うための、有効貯水量28,900万m<sup>3</sup>、堤高106.0mのダムです。香川用水は、池田

ダムから香川県内に導水し、讃岐平野の農地に対し必要なかんがい用水の補給を行うと共に、香川県の水道用水及び工業用水の供給を行うため、農、上、工の共用水路（最大通水量 15.8m<sup>3</sup>/分）、延長約 47km を建設したものです。農業用水は約 31,000ha の水田畑地をかんがいし、水道用水は高松市などに供給しています。

このように、早明浦ダムは、四国四県に水を給水するなど下流地域の都市にとって重要な水資源を確保するダムです。そのため、四国四県により「吉野川水源地域対策基金」の設立も図りながら、嶺北地域に対し様々な水源地域対策を行って来ています。また、下流地域の行政も、良質で安定的な水資源の確保について、下流地域住民の意識啓発や水源地域に対する理解などを目的として、様々な上下流交流事業を進めて来ています。



### 3. 吉野川流域における地域の取り組み

吉野川流域では、長年、様々な住民が地域づくりに取り組んできました。この中から、流域連携の取り組みなどに強く関わってきたキーパーソンや活動を抽出します。

田岡秀明氏

森昭木材株式会社代表 <http://www.kochi-bank.co.jp/ksc/023/morisho.html>

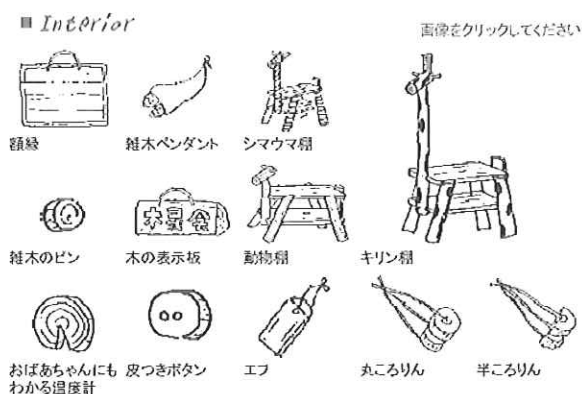
- 土佐町（嶺北地域）にて木材を扱う。
- 消費者に対して、木材をより良く理解してもらう家造りのために、施主・設計者との連携促進に取り組んでいる。
- 地域づくりにも熱心で、地域住民のネットワークを広く構築している。
- 高知県内の木材関係者のオピニオンリーダーとして、県の会議などにおいても要職を担う。



川村純史氏

協同組合木星会代表 <http://mokusei.or.jp/> (ホームページより)

- 間伐材を活かした木材家具やインテリアの製作に取り組む。
- 木星会のある大川村は、日本の離島以外では最も人口の少ない村（人口約 500 人）である。
- 早明浦ダムの上流に位置し、渇水の際、水没している旧村役場が現れることで、たびたび全国ニュースになる。
- 独創的な発想と行動力で、大川村の活力形成の中心的な存在として活躍している。



もとやま四季彩館 <http://www.reihoku.jp/shikisaikan/>

- 地元出身の女性と結婚した外国人シェフが営業するレストラン。
- 地域食材の活用を進めている。
- 関係する農家の活動をWEBで紹介するなど、地域のネットワークづくりに努力しているところ。



産直サテライト・とさ千里 <http://www.tosa-senri.com/index.html>

- 大阪府の千里ニュータウンに展開しているアンテナショップ。
- 商品は、土佐（高知）全体を扱う。特に「すまいの工房」については、土佐町（嶺北）の土佐産商株式会社が運営している。
- 嶺北の商品が、都市部で直接売られる数少ない窓口となっている。



南の風社 <http://www.minaminokaze.co.jp/>

- 南の風社は、「編集」をなりわいとする人々である。
- 編集の対象は「出版」から「地域」「ショップ」「人材」「イベント」をコーディネートするところへと広がっている。そのひとつが、「バーチャル本川村」(現いの町)。これは、ネット上で本川村の村民になり、本川村を応援する取り組み。
- 新たに学生たちを対象とした「いなかインターンシップ」を嶺北地域で展開している。
- いなかインターンシップは、すでに3期生まで修了している。学生たちは、嶺北地域で自分たちの起業の力を挑戦し、嶺北地域住民は、学生たちと関わることによって、これまで培った力を新たによりがえらせている。
- 平成18年度には、森昭木材に学生がインターンとして入り活動を行った。田岡さんの強力な力添えもあり、参加した学生は高知県のシンポジウムに参加したり、東京での全国の交流会に参加するなど、大きな反響を呼んだ。
- 高齢化により若者の姿が少なくなった嶺北地域にとっても、町から若者がやってきて一定期間住み込むことが、非常によい発想の転換の機会となっている。





どんぐり銀行 <http://www.pref.kagawa.jp/rinmu/donguri/>

- どんぐり銀行は、1992年から始まった取り組み。
- 香川県とボランティアによって運営されている。
- 香川県は、水不足に悩まされてきたことから、水源地域の環境保全についても関心が高い。
- 「早明浦交流プロジェクト」「交流の森づくり」として、毎年、香川県民が大川村などを訪れている。
- 関連して、「大川村どんぐり銀行」がある。



### どんぐり銀行

はじまりはじまり... 森の道って?

#### どんぐり銀行のはじまりはじまり...

「どんぐり銀行」のはじまりは、1992年10月3日に高松市の中央公園で開催された「ウッヂフェスティバル」の中で行われたのが始まりです。秋頃に大盛況を博したため、早稲6年度より県の事業として「どんぐり銀行」の名称で「自然環境」を推進し、「環境参加の森林づくり」の革新的な構築として継承しています。

#### 目的が目的? 調べてみると...

「どんぐり銀行」はどんぐりを育てて苗木として払い出すという生態系活動目的のシステムばかりが注目されますが、それが最終目的ではありません。資金の循環(どんぐり商店)というダイレクトメールを年4回(6、9、12、3月)増量された方にお話ししています。この循環は県内での森づくり活動(どんぐり銀行活動)の案内が載っていて、森林体験ができるようになっています。どんぐり資金をきっかけに、環境参加による森林づくり活動や、自然観察やウッヂ等をとれた森林体験をしていただき、積極的に森づくりに関わってほしい。それが目的です。また、県内(ウッヂ)の森づくりを推進し、どんぐり銀行の活動を広げたいと考えています。

#### どんぐり銀行って?

どんぐり銀行の運営「銀行」となっています。県民の活動費へお礼金、どんぐり銀行をネットワークとすると、財政的な面で

トップページ  
どんぐり銀行事務局  
〒760-8570 香川県高松市  
代表087-831-1111(内線2920)  
E-mail: [don@bank.donguri.jp](mailto:don@bank.donguri.jp)  
Since 2002.4.1



NPO法人新町川を守る会  
<http://www2.tcn.ne.jp/~nposhinmachigawa/index.html>

- 徳島市内を流れる新町川の環境再生活動から始まった。
- 河川清掃がいつしか景観整備に至り、うるおいのある徳島の街づくりへと質を高めている。
- また、毎年、吉野川フェスティバルを主催している。このような縁から、嶺北地域とも上下流交流がはじまり、いまは嶺北地域で「千年の森」づくりを行っている。



#### 水上と水敷で多彩な活動を展開

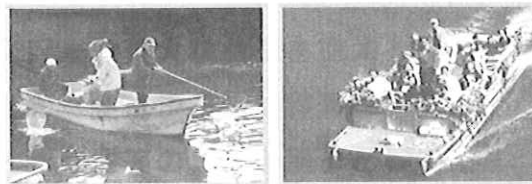
新町川を守る会は、1990年3月に「市民の汚した川は市民の手できれいに再生しよう!」と有志10人で会を発足し、毎月2回ボートで川の清掃を始まりました。

今では、徳島市のひょうたん島を囲む新町川と助任川の他、田宮川、吉野川の清掃、ひょうたん島周遊船の運転、花植え、植樹活動など、年間を通しての多彩なイベントを行っています。発足以来13年が経過し、現在では会員数も260人になりました。初心を胸に、市民の皆様の一層のご支援と協力を戴き、さらに多彩な活動を充実し、川を守り、水を活かしたまちづくりを進めていきたいと考えています。

会は「できる人が、できる時に、できることを」を基本に、参加するすべての人々によって活動が支えられています。

人々の善意による活動の輪と和をさらに広げていきたいと思ひます。一人の百歩より百人の一步を!

新町川を守る会 会長 中村 英雄



私達は、川を活かした魅力的な街づくりを目指しています。

有機のがっこう「土佐自然塾」 <http://www.tosa-yuki.com/index.html>

- 土佐自然塾は、本山町で有機農業を営む山下一穂氏、それを支援する山下修氏（末広ショッピングセンター社長）の情熱に橋本知事が共鳴して、2006年4月に開塾したものである。
- すでに2期生まで修了し、3期生が学んでいる段階ある。
- 修了生たちは、出身地に帰るだけでなく、嶺北地域内や高知県内で営農をはじめている。

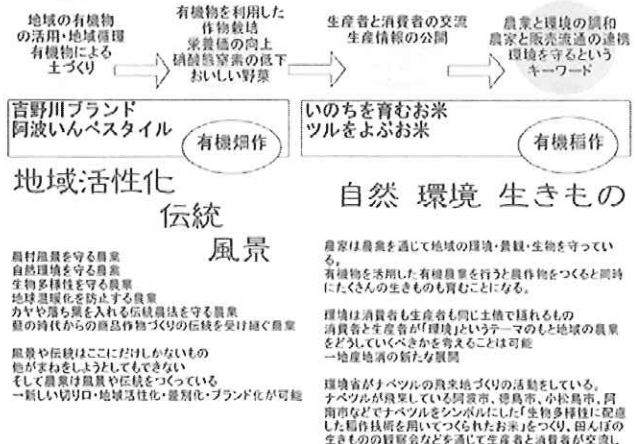


徳島有機農業を育てる会 <http://doragon-project.cocolog-nifty.com/chikara/>

- 事務局は、コープ自然派徳島が担っている。
- 会の構成は、有機農業に取り組んでいる農家をはじめ、その取り組みを応援する企業や消費者などである。
- 独自に「とくしま有機農業振興計画」をとりまとめ、徳島県内の有機農業の促進に当たっている。
- 上記の「土佐自然塾」の山下一穂氏を講師に迎えた勉強会を開催するなど、県境を越えた取り組みも行っている。



ブランド化計画の方向性について



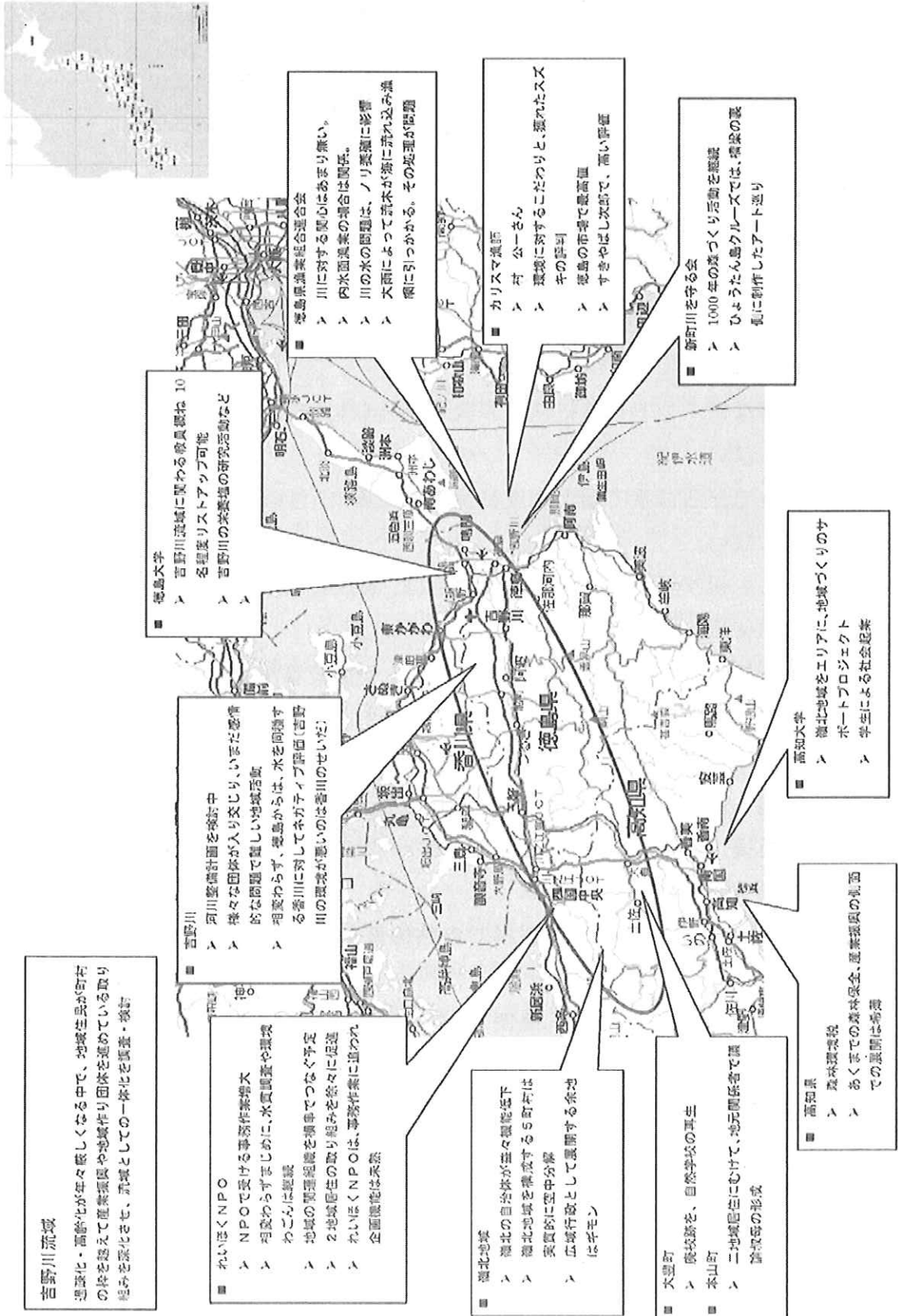
## 漁師 村公一氏

- 鳴門大機崎を根城にして夏はスズキ漁師、冬は若布漁師をする。
- 村さんの持ち込んだスズキは、必ず徳島中央卸し市場で最高値をつけている。スズキのせり場で彼のスズキは格別に銀色に光り輝き美しく、遠目でも一目でわかるという。
- トロ箱には一滴の血痕もなく、当然身はプリプリで鱗の1枚も欠落していない。試しに腹をさいても血の一滴もみられない。「洗い」にせずとも、3日目でも刺身で実に上品でおいしい。村さんのスズキは評価されている理由は、
  - ・ 特別なポイントは魚にストレスを与えないよう1週間前から船を載り入れしない。
  - ・ 捕ってからは手で頭と尻尾を持って生簀にいれる。受け網はできるだけ使用しない。
  - ・ 止むを得ず受け網を使用する場合は、鱗がとれないように結び目のないものを使用。
  - ・ 生簀のまわりは毛布でくるみ、外からの音を遮断するなどストレスと損傷を与えないように工夫。
  - ・ 自宅の生簀で十分にストレスを取り除いてから出荷。
  - ・ 尻尾をぶら下げて、血が一滴もでなくなるまで血抜きをする。
  - ・ 〆た後さらに神経を抜くことで活かった状態が1日長く続く。これは彼独自の技術。
- 村さんのこだわりは、地球規模で自然の変化を捉え、漁業に活かしていることである。
- 村さんと話をしたところ、鳴門でよい魚が捕れるのは、吉野川からの水のお陰であるという。もちろん、その源流の環境保全に対しても関心が高い。機会があれば是非、漁師村公一として関わればということである。



# ステップ4 地域住民の思いを受け止める

吉野川流域の地域づくりの取り組みについて、関係団体に聞き取りを行いました。



ステップ5 SWOT分析を用いて地域の実情を認識する

吉野川流域の一体化による水源地域の活性化を考えるために、地域分析を行いました。

現状 (SWOT 分析)		
	内部	外部
強み	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 嶺北関係者の長年の活動により、嶺北の木材を活かした商品サービス展開は徐々に認知されつつある。</li> <li>• 山から海まで、吉野川によってもたらされる食材の豊かさがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• いなかインターンシップなど、嶺北の地域づくりに外部から様々な関心と支援が入っている。</li> <li>• 輸入食材にトラブルが多く発生していることから、食に対する関心が高まっている。</li> </ul>
弱み	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 多様な食材を生産しつつも、その付加価値を高めるための展開が弱い。</li> <li>• これまで食材生産の担い手であった人々が高齢化している。</li> <li>• 嶺北地域内だけにこだわると、地域活性化に必要な様々な資本（人、物、情報、資金）が弱い。</li> <li>• 吉野川のイメージが、高知県と徳島県の県境で分断されており、一体となった戦略づくりを図る主体がない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 木材も食材も、地産地消の取り組み自体は、全国各地で行われており、独自性のある展開を行わないと様々な情報の中に埋没してしまう。</li> <li>• 圧倒的な地域イメージ・地域ブランドにつながる取り組みが弱い。</li> </ul>

## ステップ6 活性化に向けた戦略仮説を構築する

### 吉野川流域の場合 ～「食べる」に焦点

観光の楽しみの一つは、「食」です。このところ食に関する問題が相次ぎ、いわゆる無関心層といえども食の安心・安全には関心を寄せざるを得ません。吉野川流域には、少量でも質の良い食材や独自の食材が存在し評価も得ています。食の問題を考えれば、生産環境の一つである「水」の重要性も意識されます。従って「食の楽しみ」に関するコンテンツを掘り起こすことで、吉野川流域や水源地域の活動にも無関心層を誘導することができます。将来的には、口コミ（レピュテーション）で「川を食べると言ったら吉野川」となる姿を描いていきます。

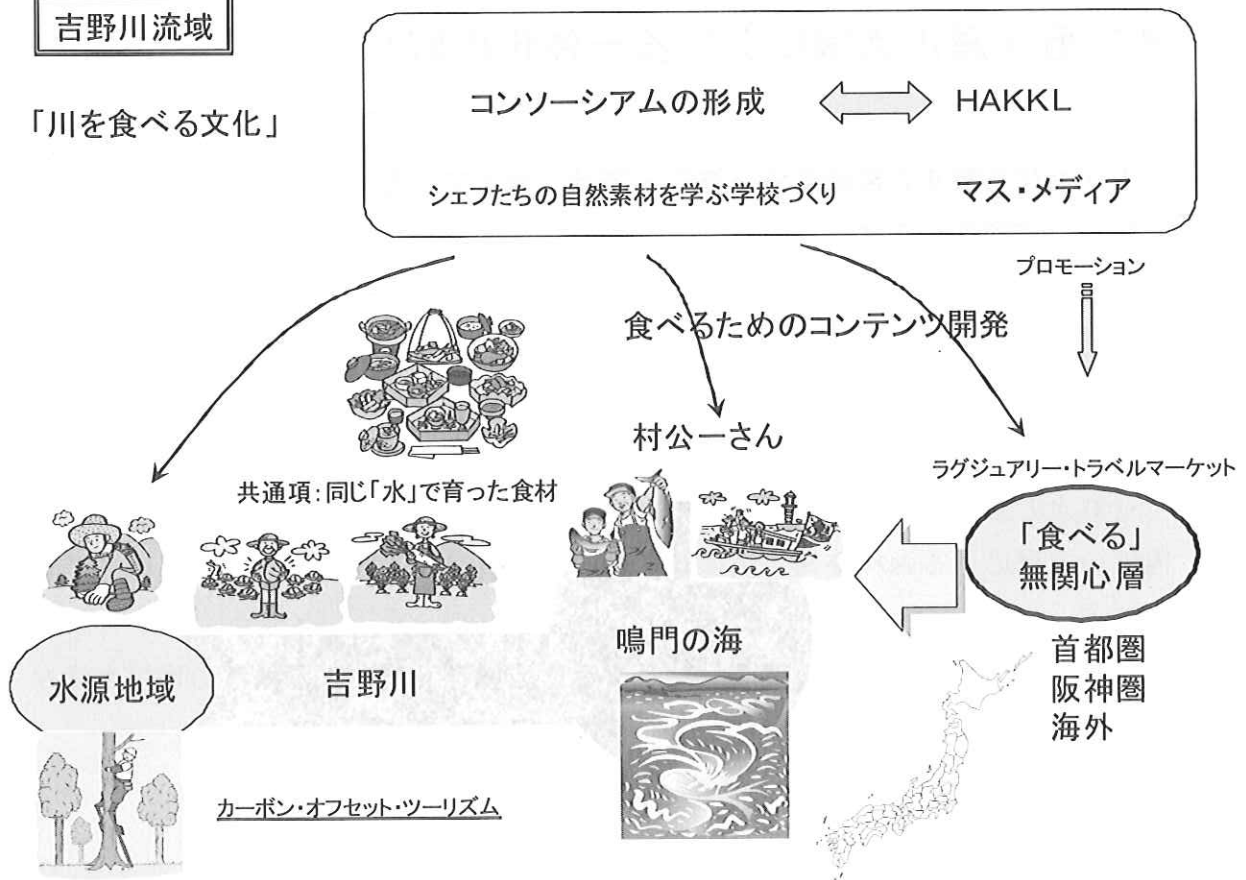
### 今後の実践

吉野川流域の水が育む安全安心な食材を、プロたちの力によって、集中的に評価を高めます。吉野川流域で「食」をテーマに考えると、最も情報発信力を持つ人物が鳴門の漁師「村さん（村公一氏）」です。彼への評価は、獲った魚のみならず、地球規模で環境を考え漁業を営む社会性も着目されています。村氏は、「吉野川の豊かな水が鳴門の海を育てる」と認識しており、水源地域の保全にも高い関心があります。そこで、村氏に関わる仲間・友人・プロの調理職人たちと共に、吉野川流域の食材を楽しむプログラムを構築し、東京や大阪などから食べることの好きな人々（つまり食の口コミ力のある人々）のマーケットを対象にプロモーションを展開します。

春以降の活動としては、環境にこだわった野菜（食材）を育てている農家さんを把握し、食材の繋がりとして、漁師さん（村さんなど）と結びつけていきます。あわせて、これらの食材を高次元で活かせる料理人の把握を行います。

**吉野川流域**

「川を食べる文化」



**ステップ7 戦略仮説に基づいて現場の人間関係を調整する**

吉野川流域の場合、水源地域側で新たな活性化の動きを作ることが厳しいことから、発想転換しました。下流域での活力を伸ばし、水源地域を巻き込むことにより、吉野川流域としての魅力を形成したり、商品開発を進めたりしていく方向性を模索していきます。

このような考えにもとづいて、鳴門の海で活躍するカリスマ漁師「村さん」の存在に着目しました。村さんの環境意識、流域や水に対する認識の高さを、吉野川流域の展開と連動させていきます。まず下流域からプロジェクトを進め、水源地域を巻き込むことにより、吉野川流域としての魅力を形成したり、商品開発を進めたりしていく方向性を模索していきます。